梅崎春生　B島風物誌

［やぶちゃん注：昭和二三（一九四八）年八月刊の季刊『作品』第一号初出で、同年十二月河出書房刊の作品集「B島風物誌」に所収された。

底本は「梅崎春生全集」第一巻（昭和五九（一九八四）年五月刊）に拠った。本文中にごく簡単な注を挟んだ。

最初に種明かししておく。題名から安易な陽性の期待を持つと痛い目に遭うからだ。題名の「B島」とは架空の島ではない。パプアニューギニア・ブーゲンビル自治州のブーゲンビル島（Bougainville Island）のことである（グーグル・マップ・データ）。しかも、本篇は太平洋戦争中の長期激戦地の一つ「ブーゲンビル島の戦い」がロケーションである。これは日本軍が占領したブーゲンビル島で、アメリカ軍が上陸した一九四三年十一月一日から停戦の一九四五年八月二十一日まで戦われたが、日本軍（特に陸軍）にとっては長い過酷な飢えとマラリアとの戦いでもあった。最初にウィキの「ブーゲンビル島の戦い」に目を通されてから、徐ろに読まれたい。但し、言うまでもないが、梅崎春生は九州の内地勤務で敗戦を迎えたから、本篇は「ブーゲンビル島の戦い」を体験した帰還兵から話を聴いて書かれたものである。

既にブログ・カテゴリ「梅崎春生」で四回に分けて電子化した。これはそれを縦書にし、ルビ化し（二行割注は読みにくくなるだけなので、本文と同ポイントで挿入し、その旨の注を附した）、ＰＤＦにした一括版である。【二〇二〇年十一月七日公開　藪野直史】］

B島風物誌

昨夜小泉が死んだ。これでおれたちは、十八名になった。

小泉は、夜になって死んだらしい。おれがゆすぶったときは、すでに身体はかたく、毛布の中で冷たくなっていた。いつの間に死んだのか、誰も気がつかなかった。しかしこうして人知れず、だまって死んでゆくのも、今では別にめずらしいことではなくなった。病気で死ぬものは、皆こんな風に、こっそり死んでゆくのだ。

小泉にしても、昨朝まではよろよろしながら、裏の川へ水くみに行ったり、炊事の手つだいをしていた。ここでは病気だからといって、ただ寝たきりで、食わせてもらうわけにはゆかぬのだ。体力の点からでは、みんなひどく弱っているのだ。誰がいつ死ぬか判らない。だからたいていのものが、死ぬ寸前まで無理に立ちはたらき、やがて力尽きてうごけなくなり、そして部屋のすみで毛布にくるまったまま、眠るように死んで行ってしまう。ほんとに、？燭が燃えつきるように、うめき声すらも立てないで！

小泉が死んだことを、おれは直ぐひくい声でみんなに知らせた。眠っているのか、誰もだまっていた。やがて暗がりの底から、

「隊長に知らせてこい」

笠伍長のおこったような声がした。［やぶちゃん注：「笠」は「りゅう」と読んでおく。］
大儀な身体をおこすはずみに、おれの臂が小泉の顔にふれたらしい。砂嚢みたいなにぶい重量感がもどってきた。そこらはまっくらで、なにも見えない。そろそろ動いても、寝ている手や足にいくつもぶつかった。そのたびに膿のにおいが動いた。
外に出て上の小屋まで、五十米ほど手探りであるいた。誰か死ぬ毎に、その報告の役目は、ふしぎにおれにあたる。永井のときも、大西のときもそうだった。おれが隊長のところへ知らせに行ったのだ。
小屋のそとから、声をかけた。
「小泉が死にました」
暗闇のなかをごそごそ動く気配がして、火を点けろ、という低い声がした。
保革油をつめた空罐の、布片のしんに光がともった。その小さい光がまぶしかった。関根中尉と不破曹長の顔があおじろく浮び上った。
「誰だ」
「小泉上等兵が、死んでおります」
おれの声は反響を失って、吸いこまれるように語尾が消えた。空罐がこちらに傾いて、おれに光をあてようとするらしい。物の影がゆらゆら動き、光がおれにまたたいた。おれはそのまま、じつと立っていた。やがて不破曹長の声がした。
「今夜は、そのままにしておけ。そして朝になったら、埋めろ」
そのとたんに、焔がちいさくゆらいで、ふっと消えた。
分厚な闇の底で、しばらくして、今度は関根中尉の声で、「十八名。これで、十八名、だな」
独白のように、言葉のひとつひとつが沈痛にしたたってきた。誰も返事をしなかった。
そしてしんしんと夜風のわたる密林のなかに、おれは再び闇を手探りながら、今来た道へもどって行った。

この小屋で、五官の覚醒は、まず膿の臭気から始まる。
時間を定めない、どろどろした沼のような眠りから、おれの五官はぼんやり浮きあがってくる。嗅覚がその時もはや、膿の臭気をはっきりとらえている。身体はまだ眠っているのに、嗅覚だけが先行して醒めているのだ。その臭気のなかに、今日生きていることの苦痛をかぎ取ろうとするかのように。
立つと頭がつかえる掘立小屋のなかに、枯葉をいっぱいしきつめてミノ虫のように毛布にくるまって、おれたちは並んでねているのだ。小屋のなかは湿気でむんむんする。天井はばさばさした芭蕉の葉である。むねの悪くなるような臭気が、いっぱいただよっている。熱帯潰瘍のただれた膿のにおいである。ほとんどが、多かれ少かれ、これにかかっている。なにしろボロボロに破れた服をまとい、はだしで密林のなかを歩くから、灌木の根や木の根に傷つけられて、そいつはかならず膿をもち、やがて潰れて頽れてくるのである。その膿やかさぶたが、毛布や服にこびりついて、腐敗したいやな臭気をはなつのだ。
みんなは傷がくずれて行っても、手を束ねてぼんやりしている。自然とかさぶたになって、

なおってゆくのを待つ外はないのだ。ここには薬というものは一切ないのだから。しかし中には、古川兵長のように、密林の中から変な臭いの木の葉をさがしてきて、揉んで患部に押しあてたりするのもいるが、そんなものが利くものか。しかし古川は丹念につぎつぎ違った葉をさがしてきては、熱心な顔付でそれを試みる。そして五味伍長に嘲笑される。

「馬鹿だな。おまえは。そんなおまじないが何になるんだ。そんなことでなおる位なら、誰も苦労しやしねえ。ほんとに底抜けの阿呆だよ。お前という男は」

「だってあんた、やってみなきゃ判りませんさ」

古川は困ったような声で、そう答える。そう答えながらも、葉を押しあてる手をやすめない。青黒い葉のしたから、膝頭の黄色く弾(はじ)けた潰瘍の部分が見えかくれする。百姓出の兵隊だが、この男の癖で、ものを言うときは妙に思い詰めた顔になる。日本が近いうちに反撃に転じて、此の惨(みじ)めな状態から自分たちが救われると、本気で確信しているのは、ここでは実のところ彼だけだ。潰瘍の手当にひどく熱心なのも、そのせいかも知れない。

しかし古川の潰瘍は、そうひどい方ではない。この小屋で、今のところ一番ひどいのは、五味伍長だ。全身に何箇所もあるらしい。彼は今、おれの近くに寝ている。鼠色によごれた毛布から、頭だけ出している。頭の毛はすっかり抜けて、うぶ毛のような柔かい髪がばらばら残っているだけだ。顔は黄色くしなびていて、瞼(まぶた)だけが死んだ鶏の瞼のようにうすぐろい。しかしこの相貌は、ここにいる兵隊全部に共通している。おれの顔も――長いこと鏡を見ないが――やはり同じ顔貌なのだろう。

五味は潰瘍の手当をぜんぜんやらぬ。服が患部にこびりついたままだ。服の表まで、膿(うみ)のいろが滲(にじ)んでいる。寝覚めのおれの嗅覚を撲ってくるのは、まずこの男の膿の臭気なのだ。

五味のむこうには、上西と鬼頭が死んだように眠っている。昨夜中まっくらな密林をあるきまわって、ジャングル野菜をあつめてきたのだ。

そのむこうの――小屋のすみには、毛布にくるまれた小泉の屍体が横たわっている。古材木のように無感動にころがっている。それでも顔には、黄色くよごれた布をかぶせてある。晩方、小泉をそこにはこんだとき、笠伍長がかけてやったのだ。そしてそのむこうには――青ぐらく光の散乱する密林の風景が、沈欝にひろがっているのだ。

小泉を埋める穴は、伴とおれとが掘った。エンピを柔かい腐蝕土につきたて、ほり起した土をこぼさないように、すくいあげて投げすてる。その動作を二三十回もつづけると、もう動悸(どうき)が烈しく、呼吸がはずんでくる。濃厚な汗が、べたべたと滲んでくる。昔ならこんな穴に、ひとりで二十分とかかりはしなかった。代る代る掘った。なかなか仕事は、はかどらなかった。おれが疲れると伴が代ってエンピを使った。[やぶちゃん注:「エンピ」は「円匙」で、塹壕内で使用するための土を掘る道具の一つで小型の軍用シャベルのこと。「円匙」は本来は「えんし」と読むが、その誤読が慣用化された、旧軍隊用語で、自衛隊でもこの呼称が受け継がれている。ウィキの「シャベル」の「塹壕用シャベル」によれば、『刃の形状は剣先スコップ、もしくはスペード型に似ている。塹壕用シャベルの第一義的な任務は』、『塹壕を掘ったり』、『整備したりすることであるが、塹壕戦においては敵兵との不意の遭遇も多かった』。その頃には『刀槍による白兵戦は廃れていたが、手持ちのシャベルは近接格闘・

護身には有用な武器になることから、殺傷力を高めるため』、『縁を研いで刃付けする場合があった。現在』、『主流の折りたたみ可能な製品は、掘削器具として使いやすいよう設計されている反面、武器としての利用には適さない形状であることが多い』とる。形状や実物・レプリカはグーグル画像検索「エンピ　シャベル　軍隊　円匙」を見られたい。」

落葉の上にうずくまり、おれは膝に頭をふせてやすんだ。膝の汗を、舌で舐めた。膝頭の間から、ちらちらと伴の姿が見えた。伴は掘りおこした土塊を、エンピで一応くだいてみて、それから外へ投げすてた。伴の顔もおそろしくやせこけて、血の気がなかった。片唇が頬まで切れて、顔半分はみにくくひきつれている。タロキナ作戦で受けた傷なのだ。片方からみると、それは人間の顔ではない。形の歪んだ眼だけが忙がしく動いている。そしてくだいた土塊からミミズをみつけると、すばやく指でつまんで、動いているやつをそのまま口に入れた。そしてまた、次の土塊をくだいた。しばらくして、またおれが代った。

小泉の屍体はかたくなって、破れたズボンから食みだした脚の潰瘍に、大きな蠅がいっぱいたかっていた。頭と足とを両方からもちあげると、真黒の蠅の群は、浮きあがるように傷口から飛び離れた。おれたちは小泉を、しずかに穴に入れた。穴がすこし短くて、屍体が曲った。小泉の死顔は土色で、薄い肉が骨に貼りついているだけであった。［やぶちゃん注：「タロキナ作戦」タロキナ（Torokina）はブーゲンビル島の南西海岸中央エンプレス・オーガスタ湾（Empress Augusta Bay）北端に位置する岬でアメリカ軍は一九四三（昭和一八）年十一月一日に飛行場建設を目的としてここへの上陸作戦を開始した。ウィキの「ブーゲンビル島の戦い」のアメリカ軍の「タロキナ上陸」（日本軍のそれへの対抗戦である第一次タロキナ作戦）及びアメリカ軍の建設した飛行場制圧のための「第二次タロキナ作戦」（一九四四年三月）を参照されたい（英文であるが、地図もある）。なお、本篇内の時制は一九四四年十一月末から連合軍オーストラリア軍が島の占領と日本軍排除を目指して攻撃を開始して以降、翌一九五五年四月以降（次の「プリアカ作戦」の注を参照）の設定である。］

「どう思うね。おまえ」

エンピをもって立っている伴に、おれはそんな風に訊ねた。伴はぼんやり穴の中を見おろしていたが、暫くしてぽつりと答えた。

「何がよ」

「いつかおれたちも、こうなるということさ」

伴はだまっていた。やがて伴はかすかに身ぶるいをしたらしかった。

掘り上げた土を穴におとすと、小泉のからだはポコッ、ポコッとへんな音をたてて、土を弾いた。そして顔や手足がだんだん埋もれて行った。

盛りあがった土を、おれたちは足でふみならした。おれたちの足首は黄黒く枯れて、一握りもないくせに、軟土に印する足跡は、平たく大きかった。掘り起された軟土をくまなく、おれたちは丹念に足でふみならした。それによって小泉の存在を、おれたちの記憶からも抹殺してしまうかのように。伴の足跡におれのが重なり、おれのに伴の足跡がかさなった。

「これでたった、十八人になった訳か」伴が足を踏みながら、低い声で言った。「プリアカ作戦に出発したころは、まだ余計にいたなあ」［やぶちゃん注：「プリアカ作戦」一九五五年三月二十八日にブーゲンビル島を南下してくるオーストラリア軍に対して、反撃作戦を取

るべく、歩兵第十三連隊及び歩兵第二十三連隊がプリアカ川（オーストラリア名：Puriata River：タロキナとブイン（Buin：ブーゲンビル島南端地区）の中間付近にある川。英文マップ「Mapcarta」のURLを参照。拡大されたい）で一斉攻撃を行ったが、作戦は失敗し、戦死傷者約千六百名を数えた。」

「五十六人だよ」とおれは答えた。「あれから三十八人がいなくなったのだ」

密林の暗いひかりが、伴の姿におちていた。おれたちはしばらく思い思いのことを考えていた。

「ときどき俺は、米田のことを思い出すなあ。タロキナから逃げてくる道で、あいつは死にやがった」

伴は曲った唇から洩れでるはっきりしない声で、そんなことを話しだした。

「――あいつはとうとう歩けなくなって、道端に伸びていやがった。やせこけて、まるで死人の顔よ。俺が通りかかると、足にしがみついてきて、乾パンを分けてくれとせびりやがった。狂犬みたいな眼をしてやがった」

「――で、やったのかい」

「――乾パンをやったって、歩けなきゃ見捨てられて、どうせ程なく死んじまうんだ。死んじまって、そのまま腐ってしまうんだ。くにではおふくろや女房や子供たちが、蔭膳そなえて、武運長久をいのってるというのになあ。――あいつは俺と、同村なんだ」

「そいで、おまえは」おれはエンピを地べたから拾いあげながら言った。「足にしがみついてきた米田を、足でけとばしたというんだろう」

伴はだまっていた。そして横をむいて、するどく唾をはいた。

埋葬が終ってエンピをかつぎ、歩きだしたとき、伴がまた独語のように言った。

「――御手洗（みたらい）も、あそこで死んだ」

「死んだやつのことばかり、思い出すんだな」

「御手洗は、軍司令官の山駕籠（やまかご）に、突きとばされたんだ。あいつは倒れて、頭を打ってそれきり起き上らなかったんだ」

四人かつぎの山駕籠の上から、眼をいからせて（それでも貴様らは、帝国軍人かっ！）と怒鳴りつけていった軍司令官のあから顔を、おれはまざまざと思いうかべていた。あのタロキナ作戦は大敗におわり、敵の猛烈な反撃に部隊は四分五裂した。飢餓と過労と恐怖に魂をぬきとられ、銃を捨て、背嚢を失い、ふらふらと敗走するおれたちの中を、邪魔ものを突きとばしたり怒鳴りつけたりして、その山駕籠は走りぬけて行ったのである。密林の湿地帯や嶮（けわ）しい岩山で、力尽きた戦友らはつぎつぎに、青ざめてたおれる。それらを見捨て、死物ぐるいで、杖にすがりながら、おれたちも逃げたのだが……

「死んだやつは、仕方がないじゃないか」

垂れさがる枝や葉をわけて進みながら、おれはそう言った。おれのうしろからついてくる伴が、しばらくして、ひとり言のように低く呟（つぶや）いた。

「俺は、死なん。死なんぞ。絶対に！」

おれがかつぐエンピの先が、葉や梢にぶつかって、ばさばさと音を立てていた。あとは黙りこくつて、おれたちは落葉を踏んだ。

昏方(くれがた)、部隊本部の連絡から、不破曹長と有馬兵長が戻ってきた。本部は、ここから二粁［やぶちゃん注：キロ。］の行程である。密林の二粁は、しかし、平地の十粁に匹敵した。小屋に入ってきた有馬は、暗く疲れた表情であった。有馬が入ってくるのと入違いに、今夜の食糧収集のため、三人の兵隊が身仕度をして、小屋の入口に出た。それにむかって、有馬が沈欝な調子で言った。

「用心して行けよ。ここら近くに、もう敵が入っているぞ。おれも、一発、ねらわれた」

どうも土民兵らしい、と有馬はつけ足すように呟いた。三人はちょっと眼を光らせて有馬をふりかえったが、黙って空のけいてん（携帯天幕のこと）を肩にゆすり上げて、やがて落葉を踏むその跫音(あしおと)は、小屋から遠ざかって行った。［やぶちゃん注：「けいてん（携帯天幕のこと）」（丸括弧は割注ではなく、本文内同ポイントの注）とは防水帆布で出来た一・五メートル四方の布で、一人用の携帯テント（別に木製のポールとペグが附属）。ここはそれを、複数、組み合わせて相応の大きさにし、小屋（と呼んでいる場所）の天幕にしたのであろう。グーグル画像検索「携帯天幕 日本軍」をリンクさせておく。］

小屋のすみで武装を解く有馬に、笠伍長がおこったように問いかけた。

「おい。敵状はどうだった」

「――二三日前から、本道に、敵の戦車が出てきたそうです」

有馬はへたへたと腰をおろしながら、顔をそむけるようにしてそう答えた。

「戦車を先頭にたてて、両側の密林をたんねんに掃討しながら、やってくるんだそうです」

「こちとらはほとんど素手だというのに、戦車などもってきやがる！」

笠は舌打ちして、唾をはげしく小屋のそとにとばした。

毛布にくるまって寝ていた五味伍長が、軀(からだ)をうごかして突然わらいだした。

「馬鹿だな。怒ったって仕様があるか。それが戦争というもんだ」

「それは判っているさ」笠は血走った眼でその方を眺めた。「しかしこんな戦争が一体あるか。毎日毎日、食うことだけに追われて、それも青臭いジャングル野菜と来やがる。見ろ。小泉だって死んじまったじゃないか」

「へへえ。おまえ、プリアカ河を越えるとき、ビフテキでも食えるつもりでいたのかい」

寝そべったりうずくまったり、思い思いの姿勢で聞いていたおれたちは、何となく声なき声をたてて笑い出した。［やぶちゃん注：この表現で、この時点で彼らはブーゲンビル島の南の端であるブイン東北のタクアン山（Mount Takuan）の恐らくは南西側の裾野附近（プリアカ川左岸近く）にいるものと思われる。この中央付近（グーグル・マップ・データ航空写真）］

やがて暗くなって、物の動きもはっきりしなくなった。毛布にくるまって、おれたちは並んで横たわっていた。まっくらな小屋のなかで、誰も話をするものもなかった。夜でも敵機が飛んでいるので、火を点けることは、特別の場合のほか、法度(はっと)になっている。みんな黙っていても、眠っているという訳ではなかった。ものを言うのが、大儀なだけであった。時々身体がうごいて、しきつめた枯葉が鳴り、あたらしく膿のにおいがした。

闇の底から、ひくい声で

「食糧をもって、援軍が来ないかなあ」
古川兵長の独り言らしかった。寝がえりを打つ気配がして、横に寝ている五味のあざけるような声がつづいた。
「援軍？　何を言ってるんだよ。援軍が、来る訳があるか。とんちき」
「だってあんた、六月末までプリアカの線から下るな、というからには――」
「援軍がくるとでも思ってるのかよ」
「だって――」と古川は苦しそうな声を出した。「自分は、作戦のことは判らんけども。援軍が来んとすれば、部隊がここにいる意味がないような気がする。援軍はきますよ」
語尾がばつんと切れて、沈黙がふたたび来た。十分位たって、五味の声で、
「意味は、あるさ。俺たちがここで、雑草食って次々死んでゆく間だけでも、ブインで、軍司令官閣下や参謀どのの命が、それだけ伸びているわけだあ」
声は陰欝に暗闇にしずんで、またふかぶかと、密林の静寂がもどってきた。誰も声をたてなかった。
おれは毛布に顔を押しつけながら、一週間ほど前に聞いたブイン地区の情報を、ぼんやり思い浮べていた。本部へ連絡に行った兵がここに伝えたものである。それによると、ブインでは兵隊でも、一日一度は米の飯をくっているし、自家製のたばこも不自由なく吸っているというのであった。それは想像できないことではなかった。おれたちが仮にブインに居るとすれば、自分たちが生産したものを、前線におくる気特になれないにきまっていた。しかし――一日に一度は食うというその白い飯のことが、いきなり実感として胸にきた。そしてことに、軍司令部や師団司令部では、直属の建設隊をつかって、豚や鶏を飼い、魚をとって、潤沢（じゅんたく）に腹を充たしているということであった。この情報は、それを想像するだけでも、皆の食慾をつきあげた。これら後方ブインの状況は、すでにあまねく前線に知れているらしかった。
草の葉を食べて戦うプリアカ戦線へ、ブインから参謀長通謀が発せられたのは、半月ほど以前である。それには、次のような文言（ぶんげん）が入っている。
「不公平は戦闘の常なるを思い、一意復仇報恩の誠をいたすべし。云々」

「不公平は戦闘の常なるを思い、か」有馬兵長は針金で木を摩擦しながら、暗い声でつぶやいた。「――本部にはな、まだ少しは塩はあるんだ。それを、ないと言いやがる。これ以上、どうやって戦えというんだ」
「本部のやつらは、何を食ってんだ？」とおれが訊ねる。
「やっぱりジャングル野菜よ。隊長だけが三度三度アツコウ（圧搾口糧）を食っているというんで、兵隊がおこってやがった。皆、黄色くしなびてら」［やぶちゃん注：「アツコウ（圧搾口糧）」大日本帝国陸軍が開発・採用した、ポン菓子を使用した携帯糧食。これには副食品として、調味した削り節をブロック状に押し固めた「圧搾田麩」と梅干・砂糖が添えられていた。グーグル画像検索「圧搾口糧　日本陸軍」の柿色をした説明書きが張り付けられた四角いものがそれ。］
空はまだ暗い。朝の炊煙はとくに危険だから、夜があけぬうちに、炊事を終らねばならぬ。

「で、まだ陣地を退っちゃいけない、というのか」［やぶちゃん注：「退っちゃいけない」は「すざ（さ）っちゃいけない」か。］

「六月末まで、現陣地に頑張れ。師団命令だとよ」

摩擦熱に粉状の火薬をふりかけて、火花がパチッパチッと散る。おれがすばやく紙にうつした。せまい防空壕のなかが、急にあかるく浮びあがった。しめった土壁が照らしだされ、おれたちの影が大きくゆらめいた。かかえてきたけいてんを、おれはいそがしく解いた。包みがとけると、しめった青い草がもり上って、ふわっと足もとにあふれた。これはジャングルであつめてきた草の葉である。それをすこしずつ握り、ひとひねりしてねじ切り、次々に飯盒（はんごう）につめる。八つの飯盒を棒に通して、もうおこり出した火の上にかけた。

おれたちはだまって火の色を眺めている。火に照らされた有馬の顔は、こわいほど蒼白く、おちくぼんだ眼孔のなかで、眼球だけがぎらぎら光りている。火にさしだしたおれたちの掌は、牛蒡（ごぼう）のようにくろく、細い手首から平たくつき出ている。有馬の眼は、じつと飯盒をみつめている。草が煮える青くさいにおいが、すこしずつ立ってくる。

「――敵はちかくまで来ているぞ」と有馬がかすれた声で言う。「おれを射ったのは、敵の斥候だ。きっとそうだ」

おれは口腔のなかで、もはや煮えた葉を噛みしめる感触を予想し始めている。腹がぎゅっと収縮する。おれは床に視線をそらしている。床には乾した唐辛子（とうがらし）がひとにぎりおいてある。塩が切れて、十日経つ。ジャングルに生えたこの唐辛子だけが、このごろ唯一の調味料だ。食べるものが、こんなごわごわしたジャングル野菜はかりで、そして塩が切れたとなれば、おれたちの身体はどういうことになるだろう？

「もう二三日も経ては、ここも砲撃をうけるかも知れないぜ。いやだ。いやだ」

有馬はそんなことを口のなかで呟（つぶや）く。口調は力がないのに、眼だけはぎらぎらと大きく見開かれてくる。

（死ぬ前に、腹いっぱい食べたいなあ。芋でも何でもいいから！）

おれはぼんやり考えている。敵にぶつかって、たたきのめされて、この密林に逃げこんでから、もう二箇月になる。ブインを出発するときに背負った芋は、ブリアカ河を越える頃には食い果たしてしまった。それから、二日に一食ばかりの圧搾口糧（あつさくこうりょう）か乾パンを支給されて

（何のたしになるものか！）小銃と手榴弾だけで、故にぶっつかったのだ。あの多数の飛行機と、戦車と、大小さまざまな砲をもった、精鋭な濠洲軍に。そしていきなり部隊の半数を失い、密林ににげこみ、敵の砲火を避けた。部隊本部との連絡もとだえがちになりながら、陣地をすこしずつ後退し、やっと今まで生きのびてきた。ここにきて、もう永井と大西と小泉の三人が、飢えに死んだ。おれもこの二三日、寝ていると、手足のさきに感覚がなくなり、胸板に重いものを乗せたような、不気味な虚脱感がある。おれも――このおれも、間もなく倒れるだろう。

飯盒（はんごう）が勢のいい火にあぶられて、やがてたまらなくなったように、クッタクッタと身もだえしている。葉が煮える匂いが、壕のなかにみなぎる。

「おい！」

有馬兵長が背をまげて、じつとおれを見詰めている。獣のような眼のいろだ。そして立ち

あがる。影も大きく立ちあがる。
「俺は、逃げるんだ。ここはいやだ。こんなところで死ぬのは、いやだ！」
おれは膝をだいて黙っている。黙って飯盒が動くのをながめている。もう飯盒も煮えたつ頃だろう。――
立ちあがったまま、有馬の影はおれを見おろしている。急に力がなくなったように、へたへたと腰をおろす。頭をじっとかかえている。やがてもとの暗い沈んだ口調に戻って、しんみりおれに話しかける。
「なあ。お前も逃げんか。おれといっしょに」
「逃げるつて、どこへ逃げるんだ？」
おれはおこったような声をだす。
「――おれには、計画があるんだ」
暫(しばら)くして有馬が、頭をかかえたまま、しずかに言う。飯盒のひとつが青い汁をふき出す。滴(したた)りをうけて頬がはげしくゆらぐ。おれたちの影が、壁にみだれうごく。
「――おれは食糧を、すこしためてあるんだ。二人で五日はもつ。かくしてあるんだ」
「どこにかくしてあるんだ？」
おれも静かな声になって訊ねる。
有馬は顔をゆがませて、材木のように黙りこんでしまう。おれは自分の口腔の内側が、しだいに乾いてゆくのが判る。飯盒がつぎつぎ音をたてて吹きこぼれる。火が消える。空から、うっすら光が降りてくる。見上げると、密林のすきまに、空がぼんやり明けかかっている。
立ち上って小屋にむかって、おれが食事合図の口笛を吹いた。やがて小屋の方から、人影がいくつもあらわれ、幽鬼のようにふらふらと、こちらの方に近づいてくる。……

敵の陣地からうちだす砲声が、しだいに間近になってきた。時たま近くにおちてくるらしく、密林をゆるがせて空気が震動した。
水筒をいくつも肩にかけて、おれは裏の川まで水をくみに行った。とちゅうで木の根につまずいて、斜面をころがりおち、木の根で膝を傷つけた。おさえた掌に、血の色がべったりついた。しばらく立ち上れなくて、おれはじっと横たわっていた。
川の近くでは、でんでん虫を三匹見つけて食べた。それは淡雪(あわゆき)のように舌の奥で溶け、芯(しん)のようなものだけが、咽喉(のど)におちて行った。それから急に食慾を刺戟されて、虫を探したけれども、食えそうなやつは一匹もつかまらなかった。水筒の紐(ひも)を肩にくいこませて、おれはあえぎながら、小屋にもどってきた。そして水筒のひとつを、また隊長の小屋にとどけに行った。
隊長の小屋は、地面に枯葉をしきつめた一坪ほどの木の葉小屋である、関根中尉と不破曹長がいた。おれが入って行ったときの感じでは、二人はいままで激論を交していたらしかった。関根中尉は上半身を起して、まっさおな顔をしていた。おれが来たのも、気がつかない風だった。ここでもかすかに膿(うみ)のにおいがした。
「最後までたたかう。最後のひとりまでたたかってやるんだ」
しぼりだすような声で関根中尉が言った。あと早口で二言三言口走ったが、それは聞きと

れなかった。
不破曹長は小屋のすみにうずくまったまま、頭を上げずにおれの方に掌をうごかした。水筒をそこにおいて、おれは戻ってきた。
今朝は分量の関係で、一食分ずつしか食えなかったから、皆は元気がなかった。入ってゆくと、みんな不機嫌に眼をひからせて、おれを見た。昼間の食糧収集が危険になったから、輪番で夜間出動するようになってから、もう一週間になる。あのまっくらな密林のなかを、足裏の感触や顔にあたる木の枝の具合で、一歩一歩さぐり歩かねばならぬから、一夜さまよっても、収穫もたかが知れているのだ。そしてすでに、敵から安全なここら付近は、ほとんど取りつくして、足を危険地帯まで伸ばさねば、ジャングル野菜は手に入らないのだ。
小屋のなかでは、歩哨や水汲みや炊事当番のほかは、皆ごろごろ横たわっている。体力を最少限に使うことで、生きる命を一刻でも伸ばそうとするかのように。――それはまた、むなしく死を待っているようにも見える。ずらずら並んだみんなの頭から、髪はほとんど脱けていて、初生児のように柔かい毛がのこっているだけだ。破れた毛布からつきでた足は、脚絆をまいているのもいるし、いないのもいて、服は一様にぼろぼろだ。干柿のような黒い皺くちゃの尻がのぞいている。
小屋のすみには、小銃や弾薬がひとまとめにおかれていて、湿気のために錆びかかっている。立ては頭がばさばさとつかえる低い芭蕉小屋だ。密林の凹地をねらってたてられているから、ここらはことに落葉がふかい。しきつめた落葉をがさがさいわせながら、みんなは寝がえりをうったり、ひょろひょろ立っては小便に出て行ったりする。軍律は、ここではもはや死んでいる。物憂い習慣として、のこっているにすぎない。言葉のはしばしや挙動のひとこまに、僅かに生きている。――そして人間の、生物の原則が、徐々に、確実に、ここを支配しはじめているのだ。
それにしても、皆は口をききやめない。言葉を発することで、自らの生きている保証をたしかめるかのように。言葉を出さないことが、不安なのだ。おれもそうだ。口を利かなければ、おれたちはどこが死人とちがうのだろう。皮膚は乾魚の肌のようにかさかさした鱗におおわれ、顔は血の気をうしなって、頭蓋そのままの形を見せている。このやせおとろえた頭蓋は、すでに論理には耐えられぬのだ。おれたちをここに追いこんだもの――それを追求する力はすでに失われている。何故おれたちが、ここで飢えねばならぬのか。断片的に意識にちらつくだけで、その根源をおれたちはどこかに置き忘れている。おれたちの会話は、だから、ほとんど出鱈目だ。いらいらしているものは、いらいらしている理由を、人を嘲けるものは、人を嘲ける理由を、すっかり自分のなかから見失っている。……
今日も古川兵長は、薄荷のようなにおいをもつ蔓草の葉を探してきて、揉んではしきりに潰瘍に押しあてている。汁が傷にしむのか、顔をしかめて足をはたはたさせる。「この野郎。俺を蹴とはしやがって！」と笠伍長がおこる。「むこう向いてやれ。ボヤ助！」
笠の眼はすごく光っている。本気で腹を立てているのだ。こめかみがおちくぼんで、赤茶けた髪が頬に密生している。この男がかつては模範兵で、序列はいつも右翼で、大陸戦線では殊勲甲のてがらを立てたこともあることを、皆はすっかり忘れ果てている。今みんなの眼の前にいるのは、やせこけた怒りっぽいひとりの下士官というだけだ。笠だけではない。み

んなに過去はない。あるのは、飢えている現在だけだ。［やぶちゃん注：戦闘に於いて最も優れた殊勲を立てたことが認められると、各人が所持する「軍隊手牒」の軍務履歴の部分に「殊勲甲」記され、と記載され、無事、内地に帰還した際には当該の金鵄勲章が授与された。］

古川はのろのろと向きを変える。そして顔をしかめたまま、ひとりごとのように言う。

「ああ。早くブインに戻って、農園にうえといた芋が食いたいや。なあ。伴」

話しかけられた伴は、歪（ゆが）んだ眼をきらりとさせたまま黙っている。

五味伍長がすみの方から、突然うなるような声を立てる。

「まだ、帰れる気でいやがる。お目出度い野郎だな。貴様は」

「だって、もう実っている頃ですよ」

「くせえ。くせえ」五味は頭を半分おこして古川をながめる。「また腐れ葉っぱを、つけてやがる。いい加減にしろ、おお、くせえ」

揮発性の刺すような異臭が、その葉からひろがっている。それはおれにも臭いのだ。この小屋の膿のにおいは、常住［やぶちゃん注：「じょうじゅう」であるが、ここは副詞的用法で「常に・何時も」の意。］つづいているので、臭気でありながら、臭気でなくなっている。それはもはや、おれたちの、この小屋の、体臭そのものになっている。葉っぱのにおいが慣れきった膿臭（のうしゅう）をぬって、嗅覚をするどく刺してくるのだ。みんなは無感動な姿勢で、眼をとじていたり、古川の葉をもむ手付を眺めたりしている。

「――歩哨はどうしたんだ。まだ戻ってこんのか？」

しばらくして、笠がとげとげしい声をあげる。

「誰と誰が行っているんだよ？」

おれは小屋のすみに、膝をだいてうずくまっている。先刻たべたでんでん虫の後味が、舌の根にすこし残っている。ねばねばしたものが薄く貼りついた感じだ。舌を口壁におしつけながら、それをたしかめている。おれは関根中尉のことばを、最後まで戦うと言った語調を、ふと思い出している。［やぶちゃん注：「口壁」私は使ったことも見たこともないが、「こうへき」と読んでおく。口腔の左右の頰側（きょうそく）（この言い方は歯科で普通に用いる）のことであろう。口腔の上顎側なら口蓋で、それと区別したものととる。］

「あいつら、やられたんじゃないか？」

さっき転んだときの膝の傷が、ずきずき痛い。皮膚がべろりと剝けていて、一寸四角ほど白い肉が露われている。血管が赤い虫のように、いくつかそこを走っている。眺めていると、その部分が急につめたくなって行くような感じがする。

五味伍長が、ひょろひょろ立ち上って、小便に出てゆく。この二三日、五味の歩き方は、なんだか手足の関節が外れたような恰好（かっこう）だ。そしてブリキのように薄い肩が、青ぐらい小屋のそとに消えてゆく。

暁方、はげしい空襲がきた。空気をひっかき廻すような鋭い金属音が、密林の底におちてきたと思うと、轟然たる爆発音がおれの頰をひっぱたいた。小屋がぐらぐらと揺れた。おれたちは忽ち（たちま）はねおきて、毛布をひきずりながら防空壕へはしった。走る間も轟音はつぎつぎ起り、密林の樹樹はひとしきり地震のように揺れさわいだ。壕にとびこんでからも、四五

発は間近におちた。そのたびに、歯ががくがくなった。
壕のなかには、今朝炊事した残り火が、白くかすかな煙をあげていた。おれたちは壁にぴったり身体をよせて、だんだん遠のいてゆく爆音の気配に、全神経をあつめていた。
関根中尉は蒼白な顔をして、濠のいちばん奥にいた。軍刀でからだを支えて、じっと煙に眼を据えていた。そして押しつぶされたような声で、今朝の炊事当番はたれか、と言った。隊長の眼は不気味にひかって、次々おれたちを舐めるように動いた。

「当番はたれか。出てこい」
当番の上西兵長と仁木上等兵を、隊長の右手がしたたかなぐりつけた。仁木はよろめいて倒れ、残り火に掌をつっこんだ。不破曹長がそれをたすけおこした。そこをすりぬけて、隊長は神経質に顔の筋肉をひきつらせながら、蒼白の表情のまま壕を出て行った。
皆はおそろしい無表情な顔で、だまりこくっていた。不破曹長は視線をふたりに定め、低い声で言った。
「空が白んだら、炊事の途中でも、火を消せということを忘れたか？」
「はあ。消しました」とにぶい口調で上西がこたえた。
「消したのに、なぜ煙が出るんだ」
そう言いながら、不破は仁木に視線をうつした。赤く火ぶくれた掌をだらりと下げて、仁木はぼんやり眼を見ひらいていた。へんに顔をそらすようにしながら、不破はふと沈んだ声になって言った。
「――空からは、煙がすぐ眼につくんだ」
それからぞろぞろと防空壕をでた。不破曹長は隊長の小屋に、おれたちは自分の小屋に戻ってきた。爆撃のせいか、小鳥や虫の音が絶え、妙にしんとしていた。落葉をふむ音だけが、かすかにひびいた。
小屋には毛布にくるまったまま、ミノ虫のように五味伍長が寝ていた。入ってくるおれたちの姿を、毛布から片眼だけを出して見つめていた。小屋には、被弾はないらしかった。その五味にむかって、笠がいやな顔をして言った。
「おまえ、何故にげなかったんだ」
「逃げたって、逃げなくたって、同じだよ」
毛布のなかから、毒をふくんで反撥（はんぱつ）するような五味の返事がもどってきた。
それから人員をあたると、歩哨についたものをのぞいて、姿を見せないのが二人いた。しらべて見ると有馬兵長と鬼頭上等兵である。しばらくたっても、帰ってこなかった。あるいは爆撃でやられたのかも知れないというので、それぞれ手分けをして、探しにゆくことにした。
おれは伴兵長と組んで、密林のなかを探してあるいた。じっとりと重い汗がながれた。樹々の奥ぶかく視線をうごかしながら、あてどなく踏み入って行った。昨朝のようすから、あるいは有馬は逃亡したのではないかと、おれは漠然とかんがえていたのである。爆撃のために密林のあちこちが、ボコッと引き抜かれたように展（ひら）けて、まばらになった樹々のあいだから、陽光がほそく斜めにさしていた。地面をおおうず高い落葉は、じっとりと露にぬれ

ていた。その上をうすいもやが、低く這っていた。空の青さが眼にふれると、おれたちは恐いものでも見たように、顔をそむけて暗みに道をかえた。

たおれている有馬を探しあてたのは、おれたちである。小屋から二百米ほど離れた地点であった。半ば折れかかった大きな樹の根に、からだをもたせかけて、有馬は淡黒く瞼をとじていた。そこらあたりからなまなましい折れ口をみせて、枝や葉が散乱し、ところどころがぶすぶすいぶっていた。死んでいるのかと思ったが、おれたちが近づくと、有馬はくるしそうに薄眼をあけた。

「足をやられたんだ。足を」

腿(もも)のところを破片がかすめたらしく、白く肉がえぐられていた。血はすでにとまっていた。割箸(わりばし)のようなものが肉につきささっていて、伴が指でそれを抜こうとした。有馬はくるしそうに一声うなり、口調にはげしい憎悪をこめて「よせ。化物め！」とうめいた。伴のガスマスクのような横顔が、一瞬するどく痙攣(けいれん)した。それは木の枝ではなくて、肉を破って突出た骨片であった。

「骨じゃねえかよ、これ」

そう言いながら、伴は身ぶるいしたらしかった。おれも顔をそこに近づけた。肉から突出た骨片は、鶏肉のそれを聯想させた。伴は側に立って、飛びだすような眼で、見詰めるらしい。呼吸を凝(こ)らす気配が、おれにも伝わった。咽喉(のど)につまったような声で、伴がまた言った。

「おまえ、なぜこんなところに居たんだ」

有馬は閉じていた瞼を急にひらいて、顔を不安定にうごかした。そしておれの視線とぴったり合った。かすかな慄えが、ふと有馬の顔をはしったと思った。おれは自分の顔を、有馬から一尺ほどに近づけていたのである。

背後で伴が、突然大きく息をはき出した。それはこわれた笛のような音を立てた。そして伴は落葉を踏んで身体を動かすらしかった。おれも身体を起しながら、何となくうしろを振り返った。伴はまばらに明るい爆撃の跡に、身体をねじむけていたが、そのまま押えつけたような声でつぶやいた。

「――小鳥のやつが、死んでいないかなあ」

「死んでいたって、木の枝や泥のしたになっているさ」おれの言葉も平静をうしなって、何かこわばった調子をたてた。

「いや」と伴はおれの方を見ないで、変に力(りき)んだ声をだした。「ちょっくら探してやろう」

散乱する木の枝をがさがさ踏みつける伴の跫音が、遠ざかってやがて消えると、おれは有馬にならんで木の根によりかかった。そしてささやいた。

「おまえが、食糧をかくしているてえのは、ここらかね？」

有馬は突然するどい声を立てて、おれにつかみかかろうとしたらしかった。しかし直ぐ腿の傷にひびいたらしく、右肱(みぎひじ)で地面をうって軀(からだ)を支えた。さえぎろうとしたおれの腕が、自然有馬をねじふせた形となった。おれの腕のしたで、有馬は顔を伏せたまま、あらあらしく肩であえいだ。おれたちはしばらく、その姿勢のままでいた。そしておれは、ゆるゆると腕の力をぬいて行った。

しばらくして、有馬は深く呼吸をはきながら、上半身をおこした。見おろすおれの眼が、

けものじみた光を帯びてくることが、自分でも判った。

有馬を間にはさんで、おれたちは肩をくんだ。しかしいくらも歩かないのに、肩にかかる重さが、おれたちをよろめかせた。有馬も全然あるけない程でもないらしかった。足をひきずりながら、歩調をあわせた。黙って樹々や蔓草（つるくさ）の間をぬうごとに、有馬はしだいに何故か不安をかんじるふうであった。

「――小鳥は、いたのか」

そんなことを変に弱々しい調子になって訊ねたりした。足をひきずりながらも、有馬はおれの方から、しきりに顔をそむけるようにした。

「いない。いるものか」暫（しばら）くして伴がとげとげしく答えた。「おまえ、俺の方はかりに寄りかかって来るな、もちっと、しゃんとせえ」

先刻もどってきたときの伴の肩に、よごれた羽毛が一ひら貼りついていたのを、おれははっきり見ていたのである。おれたちのからんだ腕の骨が、ときどきごくりと鳴った。おれの横眼にうつる有馬の顔も伴の顔も、羊皮紙のような色になって、汗がしたたか額に滲んでいた。よろめく度に立ち直って、おれたちは呼吸をととのえた。

小屋に戻ると、小屋のすみに有馬を寝かせた。寝かせるとき、有馬は乾いた眼をいっぱい見開いて、じっとおれを見つめた。それはすがってくるような重苦しいひかりを、おれに感じさせた。（そんなものを断ち切ることで、皆は生きて来たんだぞ！）おれは反射的にそんなことを考えた。毛布をかぶせてやりながら背後の話をきくと、鬼頭上等兵は、裏の川の近くで、爆撃のためでなく、弾丸に射ぬかれて死んでいたという。屍体はその場で埋めたらしく、おれが振りかえると、鬼頭の毛布の上には、弾丸のあとをとどめた水筒がひとつ、ころがされているだけである。鬼頭の所持品を上西兵長が整理しているところであった。小屋のなかにいる五六人が、何となくそれを眺めている。

所持品の、汚れた布片や手紙の間から、折りたたんだ紙片がでてくる。上西がそれを拡げる。赤と青の綿を印刷した投降ビラだ。時々敵機から、ばらまかれるものだ。その中には、投降する際にはこのビラをかざしてこい、と記してある。上西は一寸眺めて、無感動に横におく。

「おい。そいつはかくしとけや」誰かがぽつんと言った。「曹長どんに見つかると、うるさいぞ」

上西はそれをのろのろと拾いあげ、ていねいに畳んで、胸のポケットにおさめた。

「鬼頭のことは、報告したか？」

笠伍長のとがった声が、その時小屋のそとから入ってきた。そして直ぐ、寝ている有馬の姿をとらえた。

「なんだ。貴様。どこをうろついていたんだ」

「あっちです」

有馬は掌をわずかに出して、弱々しくこたえた。笠の声がそれにかぶさった。

「貴様、逃げようと思ったんじゃねえだろうな」

有馬の眼は脅（おび）えたように、急にするどく光った。笠は腰をおろしながら、おれに眼をとめ

た。
「隊長どんに、知らせてこい。貴様だ」
おれは止むなく、大儀な体をのろのろと起す。有馬の眼はおおきく見開かれ、立ち上るおれの姿におかれている。横たわっている五味伍長の足をまたいで、おれはひょろひょろと歩きだす。

夜は食糧収集に出た。五味と上西とおれである。小屋をはなれて間もなく、光は落ちてまっくらになった。まるでぬけ道のない洞穴のくらさだ。どちらをむいても暗さがかたまりになって鼻につきあたる。
一番先頭を上西がゆく。その足がカズラをひきずる音や、小枝を折る音をたよりに、手探りでついてゆく。五味伍長の、絶え絶えな呼吸(いき)遣いが、おれのあとを追ってくる。ジャングル野菜がまとまって手に入るところは、八百米ほど隔てた湿地帯だけである。そこに行く外(ほか)はないのだ。全くここらには、農園のあともなければ、椰子(やし)の樹もない。その上夜の暗がりに、生命をおびやかすどんな危険が待っているかも知れない。夜でも眼が見えるという土民兵が、手探りですすむおれたちの姿を、じつと見守っているかも知れないのだ。その湿地帯ふきんは、夜の光がひらけていて、特に警戒を要するのである。そこに近づくにつれて、おれたちの歩みはだんだん鈍った。それはただ危険をおそれるためだけでなく、全身に食いこむ疲労のせいもあるのだ。
「もう、ここらで、やれや」五味伍長が背後であえいだ。
「おまえら、どこまで行くつもりか。目ぼしいものは、ありゃせんぞ」
足裏の感触で、水の近くまで来ていることが判った。水の匂いのする方に、おれたちは静かにすすんだ。そしてときどき手足にふれる軟かそうな葉をひっちぎって、ケイテンの袋のなかに押しこんだ。水明りがぼんやり眼に入った。おれはそこらを這いまわりながら、手あたり次第の軟かい葉を押しこんで、六分目ほども満たしたらしい。神経の緊張と無理な姿勢のために、ぶったおれたくなるような深い疲労がきた。それと共に、膝の傷がずきずき痛み出した。この傷も、今朝ほどから黄色く膿を含んで腫脹(しゅちょう)していたのである。
やがて三人がもとのところへ戻ってきたとき、五味はおれたちの袋のかさを探って、
「ポヤ助。三時間もかかって、たったこれだけか」
五味の口調は毒々しいが、声はもはや消え入るような弱い響きをふくんでいる。強く声を出す力が尽きかけているのだ。この男から発散する膿のにおいは、すでに屍臭に近づきかけている。今晩も出かけるまで、小屋で丸くなって寝ていたのだ。しかしそうだといって、食糧集めの輪番を抜けるわけには行かない。
「ええ糞(くそ)。よりによってこんな暗い晩に、おれの番にあたるなんて。傷がギシギシ痛んでくるわい。こそこそ夜中に雑草あつめて食って、皆生き延びるつもりでいやがら。生き延びられるもんか。みんなお陀仏(だぶつ)よ」
おれも上西もだまっていた。身体が綿のように疲れていて、返事するのも物憂(う)かった。それからおれたちは、背を曲げてよたよたと歩きだした。進んでゆくにつれて、五味伍長はまた次第に遅れ始めた。枝をはらうかすかな音が、だんだん距離をひろげて行った。おれたち

は暗闇のなかに立ち止って、遅れた五味をしばらく待った。位置を知らせるために、上西がするどく口笛を吹いた。音は吸いこまれるように、密林の奥に消えた。そしておれがつづいて吹いた。枝や葉をわける音が遠くでしているが、それはなかなか近づかなかった。
「伍長どんも、長いことはないな」
「長いことはないな」
「もう、二三日保つかいな」
つぎつぎにたおれた戦友を見てきたから、おれたちは衰えた人間の死期を、ほぼ誤たず知ることが出来るようになっていた。
「――もうこんな戦争も、いい加減いやになったなあ」
闇のなかで、そう呟く上西の声がした。その声にむかって、おれはいらいらしながら言った。
「じゃ、逃げたらいいだろ」
上西が身じろぐ気配がした。そしてまた沈黙がきた。その中を、五味の跫音が、やがてがさがさと近づいてくるらしかった。

朝早く、不破曹長は伴兵長をつれて、本隊へ連絡に行った。現陣地の保持は困難だから、陣地を後退したいという連絡らしい。
おれは食事がすんで、小屋のなかにころがっていた。今朝ももちろんジャングル野菜だ。それも掌でにぎれるほどの量だけ。
「ああ、腹いっぱい食いてえなあ」
誰かが溜息をつく。ふしぎなことだが、おれたちに肉体的な空腹感がもっともはげしいのは、食べた直後の数分間だ。眼球が内に吸いこまれるような強い食慾が、猛然と胃をつきあげてくる。そしてそれが次第に沈みこみ、鉛のように重い飢餓感になって、一日中つづくのだ。その絶え間ない飢餓感が、おれに内的な虚脱をもたらしてくる。
小屋のなかは、今日もそれぞれの姿勢で、皆は横になっている。おれはぼんやり眼をひらいて、昨日と変らぬその光景を眺めている。うす暗い、色彩にとぼしいその光景のなかで、皆のからだは鼠色の毛布にくるまってならんでいる。しばらく眺めていると、それはおそろしく無感動な物体に見えてくる。思考や情緒をもたぬ、ほとんど意味のない物体の感じがしてくる。
（この連中は、迫ってくる死を、ただ運命としてうけとっているのか？）
そんな疑問が、ふとおれの胸をかすめる。
小屋のすみで、有馬が痛そうに呼吸をはずませながら、ぎくしゃくと起き上る。杖にからだを託して、よろよろと出口の方にあるき出す。足をふむ度に顔がゆがんで、見るからに痛そうだ。おれの足元をすぎるとき、密林の青ぐらい光が、有馬の顔にまつわるようにゆらゆらと動く。
（――暗いな）
おれはそんなことをかんがえている。そして反射的に、あのぎらぎら輝く太陽が、突然おれの胸に浮び上ってくる。それはあざやかに、末期の幻想のように、おれの胸のなかに鮮烈

に結実する。胸の内側に生えた触手で、おれはおそるおそる、それをたしかめてみる。ぎらぎらと熱い実体だ。熱帯の太陽だ。さんさんと燃えながら、光を八方に発射する。――その光はまっすぐに地球に降ってくる。そこには青い海に囲まれた島がある。厚い密林に一面おおわれて、梢と梢はせり合いながら、むんむんと葉をひろげている。光はそこでさえぎられる。そして葉と葉のすきまから、屈折に屈折をかさねて、梢から枝へ、枝から幹へ、わずかな光がこぼれてくる。光はもとの色を失って、だんだん青ざめてくる。青ざめながら、その光たちは、あたりをぼんやり明るくする。錆色(さびいろ)の幹や、蔓草(つる)や、堆積(たいせき)した落葉、光にそむいた風のいとなみが、密林の底にひろがっている。屈曲した虫類。それを探す小鳥たち。苔(こけ)むした朽木(くちぎ)。立ち上る羽虫のむれ。それを僅かに照らすものは、あの真昼の太陽ではない。厚い密林層にはばまれて、太陽はすでに死んでいる。迷いこんだ青ぐらい光だけが、この風物に参加する。――そして、この傾いた芭蕉小屋に横たわる幾人かの人間も、その青ぐらい光のなかで、もはやほろびゆく風物にすぎない。ひっそりと生死をかさねる、密林の風物の一部分だ。ブウゲンビルと名付けられた大きな島の、この灼熱した風景の蔭に、これは息絶えかけた十七匹のミノ虫だ。

(こんなところで死ぬというおれたちの役割は何だろう?)

……おれの幻想はふとそこで途切れる。今朝本隊に出発した不破と伴のことを、おれはぼんやり考えている。それは陣地を移動して、M川を越えてもっと奥に後退したいというに違いないのだ。しかしこの願いは、本隊の隊長によって、拒否されるだろう。関根隊をふくめたこの大隊は、裏を流れるM川の線を、六月末まで死守せよというのが、ブインから出た師団命令なのだ。いわば捨石としての役割であることを、皆は確実に知っている。おれたちが一握りのジャングル野菜に命を辛くもつなぎ、やがて青ぐらい風物と化し去り、次々蠟燭の尽きるように倒れて行っても、その命令の重さには微塵(みじん)のゆるぎもないのだ。その冷情を、おれたちは身に沁(し)みて受取っている。五味伍長がはきすてたように、(これが戦争だ!)という風の受取りかたで。――[やぶちゃん注:「M川」不詳。但し、先に出た「プリアカ」(Puriata)川からブイン方向へ直線で約十六キロメートル南下した位置にMamagotaという集落があり、川が貫通している(英語サイト地図「Mapcarta」のリンク)。]

小屋の外から、杖にすがって有馬がよろよろ入ってくる。排便が済んだのだ。破れた洋袴(ズボン)から、先日の傷口が見える。それは黄色く弾けて、潰瘍し始めているらしい。苦痛が彼の全身をおおっている。この二三日で、げっそり肉が落ちたようだ。物資収集やその他の雑用は免ぜられているとはいえ、身のまわりのことは自分でやらねばならぬのだ。誰も力をかしはしない。杖をはなしてくずれるように、有馬は毛布にころがりこむ。低くうめき声をたてる。おれはぼんやりと、その姿体を眺めている。食糧を五日分ほどかくしたという有馬の言葉を、おれはその時思い出している。

(有馬が怪我をした、きっとあの付近だな)

有馬はほとんど歩行できないのだから、その後それをとりにゆく筈(はず)がない。まだそっくり残っている筈だ。――

食道と胃がぎゅっと収縮するような感じが、おれをおそう。唾液が舌の根から滲みでる。舌で唇を舐(な)めながら、おれの眼付がしだいに険しくなってくるのを、おれは自分でも意識す

る。

夜が更けて、不破と伴はもどってきた。陣地退却の件はやはり駄目で、M川の線はどうしても確保せよという。現陣地があぶなければ、M川にそって、横にずれたらいいという。しかしそれでは同じことなのだ。今のところでも、M川の湾曲のポケットにいる訳だから、横にずれれば、かえって敵の方に出てゆくことになる。関根中尉はその報告をきいて、まっさおになって怒っているという。[やぶちゃん注：先に示した地図を拡大すると、Mamagotaを貫流する川は驚くばかりに湾曲、蛇行していることが判る。或いは、現在の彼らのいる場所は、この川の右岸なのかも知れない。]

その伴のぼそぼそした声を、みんなはだまって聞いている。聞いているのか聞いていないのか判らない。やがて伴は、帰途におそわれた話を始める。それは敵ではなく、友軍の逃亡兵からだ。一人は不破曹長が射殺し、も一人は逃げて行ったという。

「塩はもらってこなかったのか。塩は」

闇のなかで、不機嫌な笠の声が、伴のぼそぼそした声をさえぎる。

「はあ。塩はないです」

「ないです、と言いやがる……」

憎しみをこめた声が、細くとぎれてしまう。おれのそばにいる五味の声だ。声は咽喉にからんで、ぜいぜいとかすかに濁って消える。

「製塩隊のドラム罐が、空襲で皆んなやられたそうです」

しばらくして、伴がそんなことを、ぼそぼそと答える。

おれは眼を閉じて、ぼんやりそれを聞いている。身体がひどくだるい。身体ごと深い穴のなかに落ちてゆくようだ。瞼と瞼と合せてじっとしていると、眼窩が落ちくぼんでいる感じが、自分でも判る。しかし皮膚の表面はへんに無感覚になっていて、暑いのか寒いのかよく判らない。膝頭の傷だけが、ずきずき痛い。昨日から、傷口が、熱帯潰瘍に移行したのだ。生きている表徴のように、それはずきずきと疼きをつたえてくる。そして毛布にこもった膿のにおいが鼻にのぼってくる。

やがていびきが、大きく小さく、闇の底からおこってくる。いくつものいびきが、重なったりずれたりして、それは昧爽までつづいて行く。闇のなかで、まるで重いものを引きずって行くように。――［やぶちゃん注：「昧爽」明け方のほの暗い時。］

有馬はいよいよ参ってきたようだ。

腿の傷は潰れて、まるで大きな薔薇の花を貼りつけたようだ。赤い肉が直径三四寸も弾けただれていて、まんなかに白く骨があらわれている。排便に立つほかは、一日中小屋のすみに寝ているが、この一日で肉がげっそり落ちて、乾した鯊のような顔になった。眼だけが力なく見開かれている。

そのような有馬に対しても、皆はほとんど無関心のように見える。もはや誰も有馬に話しかけないし、有馬も一日中だまって横たわっている。言葉をかわすのは、食事をはこんでやるおれだけだ。食事をもって行ってやるたびに、有馬の眼球は、急にはっきり動いて、おれ

を見る。それは何か訴えるような眼付にも見えるし、うらむような眼付にも見える。それから上半身をぎくしゃく起して、青くさいジャングル野菜の水煮に食いつく。そばで待っているおれと、ぼそぼそと会話をかわしながら、またたく間に食べ終ってしまう。

「傷は、まだ痛むか」

おれはそんなことを聞く。ひどく痛んでいることを、百も承知の上で、おれはそんな風にいう。そして俺はふと、次のような言葉をささやきたい衝動にかられる。

（逃げることはどうなったね？）

おれは有馬の計画をすっかり知っている。それはこの漠漠たる密林をつきぬけて、どこか後方の海岸に出ようというのである。東方ブインにいたる海岸線は、数十粁のあいだに、海軍の見張所が二三箇所あるだけで、ほとんど部隊という部隊はいないのだ。うまくそこにたどり着ければ、魚や貝をとつて、こつそり生き延びられるだろう。そこらにいた土民たちも、全部山奥ふかく逃げこんでいるので、それらからもねらわれるおそれは先ずない。その上、それらの古い農園や椰子園（やしえん）が残っているかも知れないのだ。そこで食いはぐれることなく、生きのびて居ればいい。もし敵か友軍かがそこに近づいてくるならば（それは何れも死を意味する）カヌーで近くの離れ島にわたる。そこにはまだ敵性化しない土民がいるにちがいない。彼等と一緒に生活しているうちに、戦争もすむだろう。戦争がすめば、いつかは、どこかの船がその島にもくるだろう。それに乗せてもらって、ヒリッピンかどこか、もっと住みいい土地にわたって、そこで一生をくらせばいい、というのだ。

――有馬は視線を腿におとして、じつと潰瘍（かいよう）を見詰めている。そして低くささやくように独語する。

「――どんな時でも、希望をなくすな、と国を出るとき親爺が言ったんだ」

声がぽつんととぎれる。この言い方は、死ぬ前の小泉にそっくりだ。小泉も、故国のおふくろや女房のことなどをしきりに口にして、五味伍長から毒づかれながら、四五日経って死んだ。しかしもう小泉のことなどを、思い出すものは誰もいない。皆、自分の暗い行手をぼんやり見詰めているだけだ。そして有馬が自分の暗い行手に見ているものは、このように他愛もない幻想なのだ。

「傷がなおって歩けるようになってもな、お前は逃げないとおれは思うよ」

おれは突然有馬にささやく。おれはそして自分の声が、変につめたいのに気がつく。有馬はぎょっとしたように顔をあげる。あの負傷したとき、おれにつかみかかろうとした時の表情と同じだ。おれはかすかな憎しみをもって、この男の顔をみつめている。――しかしおれは、何故この男を憎む理由があるのか？

やがて暗く脅えた顔になって、有馬はおれから視線をそらす。上半身をたおして、もとのように横になる。執拗にそれを眼で追いながら、おれは飯盒（はんごう）をもって立ち上る。

炊事壕まで飯盒をかえしにふらふらと歩きながら、不破や伴をおそったという逃亡兵たちのことを、おれは考えている。この密林のなかには、そういう兵隊がさまよいあるいていて、いよいよ食うに困ってきて、道路や部隊宿舎をおそって兵隊を殺し、所持品をうばったりする事件も、すでにいくつもおれたちの耳に入っている。そうでもしなければ、逃亡兵たちは、生きてゆけないのだ。海岸にでて、魚や貝をとりながら、安楽にくらそうなどと、そ

れは夢物語にすぎない。そんなことが出来るなら、なにも友軍の兵隊をおそう必要はないのだ。そうだ。――それにもかかわらず、おれはもはや炊事壕にむかってふらふら歩きながら、あの魚や貝のことを幻想しはじめている。海岸に出たらいくらも食えるという、あの魚や貝や海藻のことを。白い魚肉や、水気をたっぷり含んだ貝の肉や、塩水のしたたる藻草。それらを口に入れ、歯でかみしめる感触。口腔のなかが乾いてゆく思いで、おれの想像はしだいに実感となってゆく。

砲声が次第にちかづいてくる。敵の砲兵陣地がだんだん間近に移動してくるらしい。夜に入っても、砲撃はつづいている。間をおいて、密林の彼方から聞えてくる。まるで密林の奥深いうめき声のようだ。

部隊本部との連絡は杜絶(とぜつ)した。昨日から今日にかけて、敵は確実に密林深く侵透してきたらしい。昨夜の食糧収集斑は、川のふちで狙撃(そげき)された。怪我人はでなかったけれども。

皆は目に見えて衰えてきたようだ。あるくときも、膝をがくがくさせるような歩き方をする。だんだん口を利く度数が減ってくるようだ。塩分の不足のため、頭が霧でもかかったように鈍くなっている。

関根中尉が、発熱してたおれたという。不破曹長が小屋にきて、それを伝える。風土的な熱病らしいが、薬がある訳もないので、ただ寝ているだけだ。不破が隊長代理となるという。それだけ言うと、不破は隊長小屋の方へ戻ってゆく。うすくなった肩を揺るようにしてゆく後姿が、妙にいたいたしい。

その後姿を見送りながら、笠伍長がうなるように言う。

「曹長どんの決断で、退却できんかなあ」

それには誰も返事しない。だまって思い思いの方向を、ぼんやり眺めている。眺めているだけで、なにも考えていないように見える。蠅(はえ)がぶんぶんとびまわって、天井の芭蕉にも、さかさに幾匹もとまっている。

おれのそばには、古川がうずくまっている。古川も、傷口に葉の汁をつけることは、止めたようだ。すっかり諦(あきら)めたらしい。――うつろな眼で、潰瘍にとまった蠅をながめながら、じっと膝をだいている。

そして今朝から、密林の中の温度がたかまってきた。湿度をふくんだ温気(うんき)が小屋にもたてこめて、外に見える樹々の葉は、そよとも動かない。

歩哨から、仁木上等兵がもどってきた。ただひとりである。一緒にたっていた上西兵長の姿が、いつの間にか見えなくなったという。仁木はそのことを、にぶい愚鈍な表情で報告した。脚が短い、頬骨のはった、農村出の兵隊だ。

「馬鹿野郎。見えなくなったつて。一体どこを向いていたんだ」

「はあ。いつのまにか、どっかに行って――」

仁木は首をぐるりと動かして、あたりを探すような動作をする。歩哨は、一人入りの蛸壺(たこつぼ)になっていて、それがふたつ並んでいるのだ。掩蓋(えんがい)のしたにちぢこまって、眠ってでも居れば、隣の動作などは判らない。仁木の額からは、しきりに汗が流れる。

「直ぐ、曹長どんに報告してこい」
笠伍長がいらいらした声で、怒鳴りつける。皆はだまって、それぞれの姿勢で聞いている。暑い、重苦しいものが、小屋全体にかぶさっている。その中を、疲れた足どりで、仁木は小屋の外へ出て行く。
暫くして、ふたたび仁木が戻ってきた。隊長の命令で、全員手分けして、そこらを探せというのである。それだけ言うと、仁木は小屋の入口にぼんやり立っている。左手をのろのろ上げて腕で額の汗をふく。左の掌はこの間の火傷で、赤く火ぶくれている。
「探せって、探して見つかるもんなら、苦労はせんわい」
「――お前、また隊長どんに打たれたのか」
大儀そうに体をおこしながら、古川が訊ねる。古川の潰瘍から、膿臭がぷんと流れてくる。仁木は佇んだまま、無表情にだまっている。片頬にうすあかく血が集っていて、殴られたあとであることが、一目でわかる。
「隊長どん。熱があるというのに、殴るとはよく元気が出るな」
おれも体をおこしながら、上西が先日胸のポケットにしまいこんだものを、ふと思い浮べる。鬼頭の遺品のなかにあった、赤と青の縞のある投降ビラだ。その文面には、投降する際にはこのビラを両手にかざしてこい、と印刷してあった。――その日本活字ともちがう、一風変った書体が、突然おれの記憶によみがえってくる。……
それでも皆は、のろのろと武装して、それぞれ小屋を出て行く。残っているのは、五味伍長と有馬兵長だ。五味も、昨日から寝たきりで、仕事をしなくなった。瞼を閉じて、じっとあおむけにねむっている。痩せこけた胸だけが、呼吸のためにゆるやかに起伏している。有馬は眼を開いて、どこかの一点を見つめている。暑いのか、両手を神経的にうごかしながら、時々ひくい声でうなる。
小屋のすみから銃をとる。おれが引きずる床尾板が長く伸びた有馬の脚にふとぶっつかる。ぎょっとしたように有馬の眼球がうごいて、おれを見据える。有馬の眼は、赤く血走っている。［やぶちゃん注：「床尾板」「しょうびばん」と読む。肩当て銃床付きの銃では、銃弾を発射する際の反動が衝撃力となって肩当て銃床に伝わり、それが肩に伝わる。この反動作用を緩和するために、銃床の一番後ろに緩衝材として接合させる板を指す。］
「――上西が、逃亡したとよ。らくじゃねえや」
おれはそんなことをいう。そして確かめるように、しばらく有馬を見おろしている。有馬は返事をしない。おれをじっと見据えているだけだ。
それからおれは、小屋を出てゆく。銃がおもく、膝頭の傷にびしびし響く。皆それぞれどこかに行ってしまった。おれひとりで、どこへ探しにゆけばいいのか。むんむんと温気のこもる密林のなかへ、おれは銃を引きずって歩きだしてゆく。
……おれはかぶさる葉や木の枝をわけながら、眼を光らせてあるいている。有馬が先日負傷した付近なのだ。おれは木から木を、凸地から凹地を、丹念に見てあるく。あの小屋から、まっすぐおれはやってきたのだ。粘液じみた汗が背筋をながれて、疲労がおもく息ぐるしい。錆色の巨樹の肌をぐるりと廻ったり、蔓草をかきのけたり、羽虫のなかに顔をさらしたり、おれは次第にあせりながら、あの地点の周囲をぬってあるく。いらいらと時間がすぎてゆく。

濃い汗が潰瘍にひりひりと沁み入る。

――そして突然、おれは立ちどまる。顔の皮膚がみるみる熱くなってゆく。銃がおれの掌からはなれてうずたかい朽葉の中へ、ずしんと倒れる。……

おれの眼にその時とまったのは、紫黒色のこぶこぶをつけた太い幹の、眼の高さの箇所にえぐられた窪みであった。その木の洞(ほら)のなかに、芋の切れ端みたいなものや、パパイヤらしいものの形が見えたのだ。おれは突然自分の身体が慄え出すのがわかった。おれは寒天のようにふるえながら、更に二歩三歩踏み入って、顔をそこに近づけた。

赤黒い点々が、それらの上をうごいていた。一糎(センチ)ほどの虫の群である。羽が硝子(ガラス)のように透き通っていて、この湿気に今日発生した虫たちであるらしい。虫はその頭部を、芋やパパイヤに食いこませながら、ぞろぞろと動いている。芋やパパイヤも、ほとんど内部は食い荒されていて、僅かに皮や蔓が辛うじてもとの形を保っている。

(二人で五日分はあるなどと、大袈裟(おおげさ)なことを言いやがって!)

頭の奥がギリギリと鳴りだしてくるのを感じながら、おれはそう考える。食い荒された残りから推しても、もとの分量は、せいぜい二人を一日保つだけだろう。しかしその時おれの胸を、有馬は五日分は優にあると信じ込んでいたのではないか、という疑念がふとかすめる。おれの身体から、慄えが急速に引いて、代って冷たい笑いが腹の底からのぼってくる。

(有馬の唯ひとつの希望が、こんな虫たちに食いあらされている!)

おれは暫(しばら)く、虫たちの動きに視線を定めている。虫たちは旺盛に身体をうごかして、貪婪(どんらん)に食い荒してゆく。おそろしいほど冷酷な確かさが、そこに営まれている。

この食物をもって、逃亡しようという気持が、今までおれの頭のすみに確実に巣くっていたことを、おれはいまはっきりと気付く。頭の中が熱くるしく凝っているにもかかわらず、おれの頬はへんな笑いをきざんでいる。何となく可笑(おか)しい。その可笑しさも、厚い幕をへだてたようで、その根源がすぐにぼやけてしまう。――おれたちが一所懸命かんがえたり、たくらんだり、悩んだり、憎んだりするものを、この赤黒い虫たちが、こんなにも冷然と駄目にしてしまう。……

暫くして、おれは銃をひろいあげる。銃はさっきよりも、三倍も重くなったようだ。それを引きずって、またおれは小屋の方に足を踏み出す。足の運びも、三倍も重い。

上西の姿を見つけしだい射殺せよ、との隊長命令が、その夕方つたえられてきた。逃亡と認められたわけだ。その命令を伝達した笠伍長は、それだけいうと、毛布の上に頭をもたせて寝ころんでしまった。瞼を閉じて、こめかみの血管がひくひく動いている。

ひどく暑い。身体の衰弱のせいか、耐えがたく重苦しい。上半身はみんな裸だ。みんなの胸は、洗濯板のように肋骨(ろっこつ)を浮き出させている。おれの胸も、一本一本肋(あばら)がとび出していて、指でおさえても、ほとんど肉がない。

有馬のようすが変だ。そばに寝ているのだが、有馬の呼吸はまるで泣声のようだ。

「傷はどうだね」

おれは時々きいてやる。そうすると有馬は息をやめて、顔をうごかし、血走った眼でおれを見る。そしてなにか言う。何と言っているのか、ほとんど判らない。うわごとのような響

きがある。
「え？　タヌキ？　タヌキがどうしたんだい」
おれが訊ねる。有馬の浮かされたような熱っぽい眼が、急に脅えた光を沈みこませてくる。そして蓋をおろすように瞼をとじる。泣声のような呼吸が、また始まる。
しばらくすると、有馬が呼吸をやめて、今度はむこうから何か聞いてくる。ぜいぜいと咽喉（のど）にかすれる音だ。
「ああ。逃げたんだ。上西は」
おれがそう教えてやる。
「あいつも、野垂死（のたれじに）するよ。そしてお前のかくしていた芋も、虫が食い荒してたぜ」
有馬の声は急にはっきりなったり、また急に訳がわからなくなったりする。急に泣声のようなうめきを立てながら、胸をひろげようとする動作をくりかえす。
小屋のなかが蒼然とくれてくる。食糧収集のため、仁木たちが身仕度してひっそりと出てゆく。
おれは毛布をかかえて、小屋の入口の方に寝場所をうつす。しかしここも暑い。風がすっかり死んでいる。
闇がたてこめてくる。――おれも瞼をとじながら、上西のことをぼんやり考えている。暑いせいか膿の臭気がいつもよりひどい。そのむこうから、有馬のうめき声が高まってくる。
「うるせえ。何を泣いてやがる」
しやがれた五味の罵声（ばせい）がする。その音も弱々しくかすれるのだ。
寝返るおとや、いびきが、小屋のあちこちに起ってくる。そしてのろのろと夜が更けてゆく。

その真夜中、有馬が発狂した。
むんむんする熱気が、昏（く）れ方から夜中にかけて、俄かにたかまってきた。みんな毛布をはねのけて、死んだようにどろどろに眠っていた。歯ぎしりやいびきのあいまに、有馬のうめき声が断続してつづいていたが、それが突然鳥のような叫喚（きょうかん）になって、有馬は闇のなかに突然立ち上ったらしかった。
「退却するんだ。退却するんだぞ。そら。敵だ。敵襲だ！」
手足をむちゃくちゃに振り廻すらしく、肉と肉とぶつかる音がして、皆が目覚めたらしい。あちこちで起き上る気配が、叫び声につづいた。
「気が狂いやがったんだ。こいつ」
組みつく音がして、その間から、脚絆（きゃはん）もってこい、という怒号がひびいた。有馬はくらがりの底に組み伏せられたらしく、押しつぶされたような声を絞（しぼ）りあげてわめいた。
「迫（迫撃砲のこと）だ。伏せろ！　ヒュルヒュルヒュル」［やぶちゃん注：丸括弧内は底本では二行割注。］
声が途切れて、骨の鳴る音が聞え、うなり声と激しい呼吸にかわった。脚絆をしごく音がつづいて、有馬は後手にくくり上げられるらしい。有馬を押えつけているのは、三四人いる様子であった。

「猿ぐつわをかませろ！」
怒鳴ったのは、笠伍長の声であった。枯葉を踏んだり、けちらしたりする音が、なおも少し続いたが、やがてそれも収まって、静かになった。皆の荒い呼吸づかいだけが、そこに残った。膿臭と汗の臭いが、むんむんと小屋のなかに立てこめた。
「すみっこにころがして置け」
笠の声が、まだあえぎながら言った。
「明朝になれば、正気づくだろう」
おれは闇の底にひらったくなって、その声を聞いていた。格闘には参加しなかったが、いきなり眠りを破られた動悸が、胸の中にまだ烈しかった。それから三四人で、有馬の身体を材木のように持ち上げて、小屋のすみに運ぶらしかった。それからまた、それぞれ、自分の場所にもどってゆく気配であった。
そして朝になって、有馬は冷たくこわばって、小屋のすみに死んでいた。脚絆で足と手をしばられ、口を堅く布片がおおっていた。腿の傷から、深く出血したらしく、その下の枯葉がどす黒く染っていた。出血が原因なのか、体力が尽きたのか、窒息したのか、それは判らないけれども、有馬の体は細長くのびて、後手に廻したまま、朽木のように死に果てていた。

有馬を埋めようとするとき伴がぼんやりした声で言った。
「――前のときも、お前と一緒だったな」
「小泉の時だよ」暫く考えて、おれが答えた。
伴はうなずきながら、自分の額を指でこつこつ弾いた。
「頭がぼやっとして、何もかも忘れとる。あれから誰々が死んだかなあ」
おれはゆっくりと、鬼頭、有馬、上西と数えあげた。
「上西は生きとるかも判らん」
今朝もひどく暑い。その上、湿度が昨日より高いようだ。
（雨が来るんだな）
おれは頭のすみで、そんなことを感じながら、穴のなかを見下した。体力が衰えて、手が萎えたように動かないので、穴の深さは一尺に足りない。それでも二時間も掘ったのだ。その間にミミズを一匹見つけて食べた。体内から塩分が欠乏しているせいか、おれの舌はミミズの中にも塩の味を探りあてた。――その穴のなかに、有馬の身体は、うつぶせになっている。この有馬も熊本で召集されて以来の、おれの同年兵だ。破れた服のあいだから、肉のうすい尻が見えている。まだ熊本にいた初年兵のころ、有馬は快活で世話好きの男であったことを、おれはいま遠く思い出している。どこかの商店につとめているということだが…
「この間こいつは、何故あんなところにいたんだろ」
伴がかすれた声で、独語する。
「あんなところに居たから、やられたんだ」
……肉づきのいい頬をもった男で、子供もひとりあったという話だ。その写真をおれは見たことがあるが、なかなか可愛い子供だった。そんなことを、おれはぼんやりと思い出している。その思い出が、ここにうつ伏せになった屍体と、うまくむすびつかない。なんだかば

らばらの感じがおれの胸におこる。それを振り切るようにして、おれはそっけなく伴に答える。
「運だよ」
「運だって、お前。ちゃんと防空壕ににげこめばいいんだ」
「だからよ、運が悪かったんだ」
伴はおれの言葉も耳に入らぬように、ふうっと溜息をつく。
「――こいつあの時、おれのことを、化物、と言やがった」
傷痕にひきつれた伴の横顔が、穴のなかを見おろしている。おれの視線をかんじたのか、伴がふと顔をあげて、おれを向く。そしてきらきら気狂いじみてひかる眼をして、不気味な笑いを頬にうかべる。そしてあえぐように言う。
「つぎつぎ、死んで行くなあ。勿体(もったい)ない話だよ、妻子もあるというのに」
「いずれおれたちも、こうなるさ」
しばらくして、おれがそう言う。自分の言葉のひとつひとつがへんに確実に、胸にしたたりおちるのをおれはかんじる。
「――これで、関根隊も、十五人か」
伴の言葉は、妙につめたくひびく。屍体を見下している伴の眼付は、大きく飛びだしていて、ぞっとするほど偏執的な光をおびている。
「この次は、誰の番だろう!」
青ぐらい密林の光のなかで、おれたちは黙ってしまう。そしてどちらからともなく、足をうごかして、掘りおこした軟土を穴におとし始める。服の破れから、尻のあたりへ、黒い土がかぶさってゆく。だんだん全身がかくれてゆく。
べたっと平たい足跡を、土に印しながら、伴が低くつぶやく。
「次は、五味伍長どんの番か」
声はなにげないようでいて、伴のひきつれた顔は、冷たく硬(こわ)ばっている。頭では他のことを考えているようにも見える。
いらいらした声で、おれが答える。
「判るもんか。お前の番かも知れないぜ」
伴が短い声をたててわらう。笛のような声だ。
遠くから砲声がひびいてくる。すっかり土をかぶせ終って、おれたちは軟土をふみかためる。足ぶみしているだけでも、おれの膝はがくがくする。汗がべたべた滲みでてくる。潰瘍の部分がいたく疼く。おれは眩暈(めまい)しそうになるのをこらえながら、軟かい土をふみつける。
――明日になれば、皆は有馬のことも忘れてしまうだろう。名前も、顔も、そんな男がいたということも、誰も思い出さなくなるだろう。
伴が木の枝を探してきて、土に立てる。この粗末な墓標を、伴は確かめるように何度も傾きを直す。その伴の手は、手首と肱の太さが同じで、黄黒い棒のようだ。
不破曹長の命令で、銃器の点検をした。そして使用に堪えないものは、廃棄した。残ったのは、十挺あまりの小銃と、弾薬と、数個の手榴弾(てりゅうだん)だけだ。

隊長はいよいよ悪いらしい。今日おれが水筒をもって行った時、隊長は平たくなって眠っていた。額は汗にぬれ、膚は黄色く乾いていた。枕許の飯盒(はんごう)には、今朝煮たジャングル野菜が、少量食べ残され、小屋のなかは膿臭とともに、熱っぽい異臭がただよっていた。おれの跫音で眼をさましたらしく、淡黒色の瞼がどんより開いた。

「――不破か。そこにいるのは、不破か」

おれは、おれの名前を言った。そして水筒を枯葉の上におき、戻ってきた。樹々の間をもれる光が、どうもうすぐらいと思ったら、雨が密林の上にとうとう降り始めたらしい。やがてばたばたと雫のおとが、芭蕉の葉の上に鳴り、それはだんだん繁(しげ)くなって行った。熱気がそれと一緒に消え、ひえびえとした空気が縞(しま)になって皮膚をわたった。

歩哨交代で、伴と仁木が戻ってきた。ふたりとも顔いっぱい雨に濡らせて、色あおく、幽鬼じみて見えた。やわらかい髪がべったり頭の地に貼りつき、その落ちくぼんだ眼は、なにか険しくひかっていた。

「異状なかったか？」

「べつに異状ありません」

伴がひくい声で笠伍長に答えた。そして顔をそむけるようにして、小屋のすみで武装をといた。それがすむと、疲れ果てたようにごそごそと自分の毛布にころがりこんだ。

空気が冷えてきたので、ねている連中はそろって毛布をかけた。五味伍長なとは、顎(あご)までも毛布でおおい、うすく眼をひらいていた。有馬が狂気したとき、五味は胸のあたりを打ったらしく、翌日から排便に起きるのも、ひどく苦痛を感じるらしい。しかし彼は、それを顔に出そうとはしない。

「――雨が降ったから、デンデン虫が出てこないかなあ」

おれのそばで、古川がそんなことをつぶやく。

「なあ。伴。デンデン虫いなかったかよ」

「いるかよ」

伴は不機嫌にはきすてる。なにかぎょっとした風だ。そして寝返りしてむこうを向く。伴の頸(くび)は、背後から見ると、えぐれたように肉が落ちていて、痩せこけた子供みたい、だ。そのそばで仁木が、掌を眼の前にひろげて、ぼんやり眺めている。掌は赤くふくれている。火傷(やけど)だ。

雨の音が芭蕉の葉にあたる。ときどき屋根からつめたく一滴おちてくる。小屋の内も外も、人間も植物も、なにもかも暗い。

（今日、銃器を点検したのは、何のためだろう？）

おれはこの暗い風景をながめながら、そんなことを考えている。転進するつもりかな、それとも突撃するつもりかな、などと思ってみる。思ってみるだけで、どちらも現実感はない。どちらにしても物憂(う)い。

（――意味はなかったのかも知れない）

おれの銃は、錆がひどくて、廃棄された。その代りに、死んだ鬼頭の銃が、おれのものとなった。この銃と数発の撃薬が、どのような敵からおれを守ってくれるのか。

「――曹長どん。退却する覚悟をきめたらしいな」
錆びた声で、笠伍長がいう。
雨はやんだようだ。樹々の下葉をたたくおびただしい雫のおとは、ふと雨が降りつづいているような錯覚を感じさせるが、もはや降り止んだ証拠には、雫の音のむこうに、ふかい静寂がはっきり感じられる。ここは歩哨線だ。蛸壺(たこつぼ)の低い掩蓋(えんがい)も、密林の葉から葉へ、そして下へおちてくる無数の雫が、ひたひたと当る。
「そうですか」
おれはぽつんと答える。こちらの蛸壺にも雨水が流れ入って、身体はべたべたと濡れている。破れた服が皮膚にはりついて、気持ちがわるい。悪感（おかん）が絶えず背筋をとおりぬける。［やぶちゃん注：「悪感」はママ。後も同じ。熟語として「悪感」はあるが、その場合は「あっかん」であり、「おかん」はあくまで「悪寒」であって「発熱の初めなどに感じる、ぞくぞくとした不快な寒け」を指す。］
「どうも、そうらしい」
少し経って、笠がまた口を開く。
「隊長どんも長いことねえだろ。そうすれば、M川をわたって退却のつもりよ」
「――師団命令に反するわけですか～」
「独断専行というやつよ」笠は視線を前方に固定せたまま、そう言う。「このままじゃ、全員飢死(うえじに)だ。曹長どんも判っていらあな」
笠の眼はきらきら光っている。おれも蛸壺から首だけ出して、前方を見張っている。見通しのきかない密林だから、いつひょっこりと敵が出てくるかも知れないのだ。おれたちの交す会話は、ごく低い。ここでは音がもっとも有力な索敵(さくてき)の手がかりだから、高い声を立てるのは禁物なのだ。
雨のように聞こえていた雫が、しだいに間遠になってゆく。ポトリ、ポトリ、と数えられる位になったとき、笠がまた呟く。
「まだ、交替はこないのか。何をしてるんだろう。ポヤ助たちめ」
M川をむこうに渡れば、まだ農園のあとがあるかも知れない。そして芋やバナナが、不自由なく食えるかも知れない。そんなことが頭にうかんでくる。しかしそこで食いつくせば、また同じ破目に追いこまれるだろう。
背後から、がさがさと音が近づいてくる。交替がきたのだ。おれたちは手や足をつっぱって、蛸壺からころがり出る。笠が地面出ても、おれはなかなか出られない。手足の力が弱っているのだ。笠の手をかりて、やっとおれは這(は)いあがった。低い声で中継ぎをすませ、おれたちは枝や葉をわけて、小屋の方角をたどった。
有馬を埋めたところが、雨に洗われて、屍体がすこし露出していた。それを見たのは、この戻り道である。おれが先に見つけ、笠伍長に知らせた。濡れた土から、破れた服や肉体がのぞいていた。そしてぎょっとして、おれたちは立ち止った。
「あれはなんだ」
笠がおこったような声をたてた。屍体の臀(しり)の部分が、泥にまみれてはいたが、えぐられていることがはっきり判った。笠がそこに顔を近づけた。切りとられた臀は腐った牛肉のよう

な色をしていた。
「――刃物だな。この切り方は」
おれは嘔(は)きたいような気特になって、眼を外(そ)らした。笠は背をのばして、脚先で土をかぶせてやりながら、沈欝な一声で言った。
「――このことは、誰にも言うな。曹長どんに報告して、善後策をきめる」
「――逃亡兵のしわざかも知れません」
おれも土を押しやりながら、そんなことを言った。伴たちをおそったという逃亡兵のことを、おれはふと思い出していたのだ。しかしおれの言葉は、弱々しく途切れた。
「牛蒡剣(ごぼうけん)をつかったな。畜生」[やぶちゃん注:「牛蒡剣」刀身の長さと黒い色から通称された陸軍の「三十年式銃剣」のこと。明治三〇(一八九七)年採用。第二次世界大戦に於ける日本軍の主力銃剣である。]
おれの言葉が耳に入らないように、笠がつぶやいた。
「刃先をしらべりゃ判る。どいつが切りやがったか」
おれは黙って立っていた。あの密林の底、傾きかけた芭蕉小屋の片すみに、ずらずらとおかれた牛蒡剣のひとつが、人間の脂が滲んで曇っているかも知れないことを、おれはかんがえていたのである。悪感がまた、かすかな戦慄をともなって、おれの背を奔(はし)りぬけた。おれの皮膚の表面は、つめたく濡れているのに、身体の芯(しん)は熱っぽく燃えていて、頭がしんしんと痛んだ。疲労とも虚脱ともつかぬ無力感がおれの全身を領していて、おれは今にもぶったおれそうになりながら、ひとつのことを頭で思いつめていた。
(なぜおれたちは、こんな場所で、苦しんだり、その揚句(あげく)、死なねばならぬのだろう?)
何のために、そして、誰のために?
「行こう」
うながすような身振りで、笠が先にあるきだした。おれが背後につづいた。よろめきながら、ぬれた落葉を踏んだ。

伴と仁木の処刑から、今もどってきたところだ。処刑場は、有馬を埋葬した場所のちかくだ。この間の爆撃で、樹樹がまばらに明るくなったところだ。
大小の破片がいくつも突きささっている喬木(きょうぼく)を背にして、二人は両手をうしろにくくられて、じっとりぬれた朽葉の上にひざまずいていた。汗と汚れでまっくろになって、肩や背や膝がちぎれてぼろぼろの服に、黒い朽葉がいくつも貼りついていた。
「どうだ。お前たち、自決できるか?」
不破曹長が低声でそう聞いた。
「できます」
伴は下をむいたまま、しずかな声でこたえた。頬まで切れた皮膚が、かすかに慄えているようであった。仁木は返事をしないで黙っていた。おれたちは四五間[やぶちゃん注:七メートル強から約九メートル。]はなれたところに立って、それをぼんやり眺めていた。笠伍長が、二人の縄をといてやった。それは手荒いやり方だったので、仁木は痛そうに顔を歪めた。先日壕の残り火につっこんだ掌が、赤くただれているのだ。そして古川が、二人にそれ

ぞれ小銃をわたした。二人は坐ったまま、それを受取った。膝をくずして、片足を前につきだし、つきだした足の親指に銃の引がねをかけ、身体をすこしうしろにそらせて、銃口を眉間(みけん)にあてた。

「何か言いのこすことはないか」と不破がまた訊ねた。

「――ありません」そして伴は顔をあげて、つづけて何か言おうとした。しかしそれは、言葉にはならなくて、顔の表情がすこし動いた。それはぎょっするほど無気味な、陰惨な笑いの影であった。おれは思わず面をそむけた。

「よし」

不破は呟くようにうなずいて、二人の方を見ないようにしながら、掌をあげた。

二人の足の親指は、ほとんど同時にうごいた。朝の静寂をやぶって、烈しい銃声があたりの空気を引きさいた。

仁木は右手でにぎっていた銃を引きずるようにして、ゆっくりうしろに倒れた。そのまま動かなくなった。眉間から鼻すじをつたって、鮮血が流れて顔をぬらした。

伴のからだは、突きだした右足の方へ、横に倒れた。これも倒れたまま……動かなくなった。しかし彼の顔から、血は噴きだしていなかった。笠が近づいて、床尾板で伴の足をこづいた。

「不発か？」

古川が伴の銃をとりあげて、なかを調べた。不発弾は、めずらしいことではなかった。ひどい湿気のために、小銃弾は不発の方が多い位になっていた。

「――不発です」

「音がしたんで、こいつ、死んだつもりになったんだろう」

笠はそう言いながら、ぐるっと顔をまわして、おれの姿に眼をとめた。

「おい。お前」

掌を動かして、伴を射てという仕草をした。おれはその方へ、のろのろと近づいた。筋肉の衰えで、立っているのも苦しい位であった。おれは自分の銃をやっと持ち上げるようにして、伴の脳天にあてがった。みにくく引きつれた伴の顔は、無気味な笑いをうかべたまま、半分朽葉のなかに埋もれていた。この伴と、数年間ともに苦しんできた戦場の記憶が、瞬間おれの胸をつらぬいた。――おれは目をつむって、ぐいと引金をひいた。伴の身体は、一瞬びくっと痙攣(けいれん)して、その感触をおれの小銃に伝えた。伴はそれっきり、動かなくなった。鮮血がまるく盛上って、頬へするすると流れおちた。処刑はそれで済んだ。

不破曹長はふたつの屍体にむかって、しばらく黙禱(もくとう)した。やがて顔を上げて、沈んだ声で言った。

「それじゃ、笠伍長、あとをたのむ」

そしてふらつくような足どりで、小屋の方にあるきだした。薄板のように突っぱった肩先が左右に揺れながら、樹樹に見えかくれし、だんだん小さくなって行った。

それから笠伍長の指示で、みんなはかついできたエンピなどで、だまって穴を掘り始めた。穴は二つの死体のすぐ側であった。濡れた朽葉がわけられ、土がばらばら飛んだ。

おれは屍体に近づいて、それぞれから銃をもぎとった。ふたりとも堅く銃を振りしめてい

て、指をはなすのに骨が折れた。やっとのことでもぎとると、それらを引きずりながら、この場所をはなれた。銃は重かった。肩が抜けそうな気がした。おれは身体のなかで、生命力がしだいに頽(くず)れてゆくのをありありと感じながら、最後の力をふるい起すようにあるいた。昨夜、重苦しい疲労にもかかわらず、おれはほとんど眠れなかった。そして今朝、処刑場にゆくときも、もすこしで前のめりに倒れそうなのをこらえて、足を引きずったのだ。

ちらちらとするものが、しきりに暗い視野を飛ぶ。つめたいものが皮膚のあちこちをかすめてゆく。力が尽きかけてきそうになる。垂れた枝が、顔にあたるのも、はっきり判らない。おれは必死に眼を見張って、重い銃身を、あえぎながら引っぱった。

小銃を小屋のすみに立てかけて、おれは今毛布のなかに横たわっている。おれのすぐそばには、五味伍長があおむけに長くなっている。処刑場にゆかなかったのは、この五味だけだ。先刻伴と仁木のふたりを引っくくって、処刑へ出かけようとする背後から、

「いまさら、死刑にして、何になるんだい。たかが死人の肉をちょっぴり食べたくらいで？」

それだけ毒づくのに、胸を大きく起伏させて、五味はぜいぜいとあえいだ。その五味もいまは眼を閉じて、じっと横たわっている。眼がふかぶかとくぼんで、額が黄色くかさかさに抜け上っている。おれの眼からは、鼻翼がすこしも動かないように見えるのも、五味がすでに蠟燭が燃え尽きるように、息が絶えてしまったのかも知れない。鼠色の毛布の上に、五味は掌をあわせて、骨のような指をくんでいる。起き上って確かめてみるのさえ、今のおれには力がないのだ。

処刑場から、まだ誰も戻ってこない。

じっとしていると、身体がしんしんと奈落に落ちてゆくようだ。静かなこの小屋のなかで、力強い羽音をたてて動いているのは、数匹の大きな蠅だけだ。毛布の破れから露出した五味の潰瘍に、それらは翔(ま)いおりたり、それから飛び上ったりしている。そしておれの顔にもまい降りる。

おれはぼんやり眼を見開いて、あたりを眺めている。明るい太陽や、青々とした水田や、白壁の家や、また遠方を走る汽車や、そんなものがきれぎれに頭に浮んでくる。故郷に住んでいる人々の俤(おもかげ)が、はっきり形をととのえないまま、おれの意識を流れ去る。そんなところから遠離して、この暗い密林の底で、死にかかっているということが、生れたときから判っていたような、またおそろしく奇妙なことのような気がする。――

遠くから、どろんどろんと響く砲声が、耳に入ってくる。蠅の羽音が、その間を縫う。五味の鼻孔に、その一匹が羽をやすめてとまる。五味の表情は、じっと動かない。黄蠟のような皮膚のうえで、蠅は脚をすり合せる。そしてそろそろと鼻孔のなかに這(はい)入ってゆく。五味の膚はかるく閉じたまま、しんと動かない。［やぶちゃん注：「黄蠟」「おうろう」或いは「こうろう」と読み、ミツバチの巣から製した黄色の蠟を指す。巣を加熱・圧搾して水中で煮沸して取り出す。］

（こんどはおれの番だな）

おれの意識に、それがにぶくのぼってくる。この黄色く褪(あ)せた唇から、かつて毒々しく発言された（これが戦争というものだ！）という言葉を、おれはぼんやり想い出している。そ

してそれは、言葉として浮んでくるだけで、胸のなかに沁(し)み入ってゆかない。どこかで散って、消えてしまう。そのくせ頭の遠くの方で、何かがつめたく合点合点している。

五味の身体のむこうに、密林の風物が青ぐらく拡がっている。その景観ですら、ちらちらするものにさえぎられて、しだいに周囲からぼやけてくる。おれも五味も、あの暗い風物のなかに入ってゆくのだ、と思う。そして間もなく、残る十三人の兵隊も。——

また遠くから、砲声がひびいてくる。しんしんと墜落(ついらく)する無量の速度のなかで、おれも眼を閉じ、五味と同じように掌をあわせ、骨のような指をかるく組合せている。しずかにしずかに、何かを待ちながら。……